

少し照れくさいが……

豊永郁夫
愛知県・六二・自営業

ごめん。この企画に参加して、ペンを執る気にならなかったら、恐らくこんな手紙など死ぬまで書いてないだろうと思う。だからといって、お前を愛してないんじゃない。これからも愛していく。

この所、お前もはつきりと自己を主張するようになった。世の中が個人を尊重する風潮だから、それもいいだろう。

今でも、娘時代のヘアスタイルのまま変わっていない。それと同じに人柄も変わっていないのが嬉しい。当時のお前には、沢山のボーイフレンドがいた。その青年たちと同じことをしては、とてもお前と結婚できないと思った。

先手必勝とばかりにおふくろに出馬してもらい、私のプロポーズの気持ちを、お前の両親に伝えてもらい了解してもらった。将を射るならまず馬である。それが効き目があったことを知った時は本当に嬉しかった。

私たちは幼馴染みで、親同士もよく知っていた。そのせいで話はスムーズだった。普通の夫婦ではなくて、二人は幼馴染みだから分かっているだろうと、ずっと思い込んでいた。

しかし、欧米の人のように何でも言葉で言っただけで表現して欲しいのが女である。最近では思っている。そこで、改めてこんな手紙を書いた。

やっぱり、少し照れくさいが愛している。これからも愛していく。この手紙の文面は勿論、その行間にあるこの愛を感じて欲しいものである。

かつては、神戸と高知に離ればなれになっていた。その間も二人を結んだのは手紙であった。

あの頃のように返事をおくれ。何気なく文の中に愛が感じられる返事をおくれ。首を長くして待っている。